

〈要約〉

情報リテラシーにおけるタイピング能力の重要性について

Importance of Typing Capability in Information Technology Literacy

柴 田 徹
Toru Shibata

スマートフォンやタブレット PC の普及に拍車が掛っている。無線 LAN 環境も高速化・低価格化が進み、教育現場においてもスマートフォンやタブレット PC を利用した教育方法が増えつつある。しかし、その一方で、最近の学生はパソコン自体の利用頻度が減り、キーボードの操作能力の低下傾向が伺える。キーボード操作の基本能力であるタイピング能力は、学生が社会に出た時、パソコンを用いた業務の処理能力に直結する。スマートフォンやタブレット PC は、手軽で直観的な操作ができるため、情報の検索や参照に向いている。他方、パソコンやキーボードは情報の入力（登録）に向いていると言える。

現在の学生のタッチタイピング能力（キーボードを目視することなく、正しい指で正しくキーを打鍵できる能力）について調査を実施し、その実態を明らかにした。

結果、日本語入力、英語入力とも、ある水準のタイピング能力を保有していることが分かった。しかし、タイピング入力の練習を数回繰り返すだけで、更にタイピング能力が向上していることから、小学校から高校までの情報通信技術教育において、十分なタイピング能力の開発は行われていないことも推察できる。更に、タッチタイピングにおいては、数回の繰り返しではその成績は向上せず、結果タイピング入力数も増えていかなかった。すなわち、正しい指で正しいキーを打鍵するような基礎訓練は充分に行われていないことが判明した。

教育現場においては、スマートフォンやタブレット PC などへの安易な移行は危険であり、情報通信機器を利用する基礎能力であるタイピング能力は、「読み」「書き」「そろばん＝算数」と同じレベルの基礎能力の一つであり、幼少期から小中学生期にしっかりと身につけさせる基礎教育が必要であると考えられる。